

IFORS—ORの新しい方向を求めて

1. IFORS CANADA '78

の特集について

司馬正次

カナダのトロント市で去る6月19日から23日まで、IFORS(国際OR学会連合)の第8回国際会議が開かれた。この会議は3年ごとに行なわれるもので、1975年に日本の東京と京都で開かれたのを覚えている方も多いであろう。“カナダでまた会いましょう”と別れてから、早くも3年たったのである。

今回も30カ国をこえる世界の各国から約250名のOR関係者が集まった。われわれの日本からも、カナダ、アメリカにつぐ23名にのぼる参加者があった。この国際会議は、その時点でのORの進歩

1. IFORS CANADA '78 の特集について
2. ORの行方をめぐって
——IFORS CANADA '78 の底流——
3. テーマ別の動向
 - 3.1 エネルギー問題
 - 3.2 地域・環境問題
 - 3.2 輸送問題
 - 3.4 数理計画—ワークショップを中心として—
 - 3.5 IFORS CANADA '78 の発表論文など
4. カナダにおけるOR
——年次大会にみるカナダOR学会の横顔——
5. OR視察団報告
 - 5.1 OR視察団について
 - 5.2 ORの実践・活用セミナーから
 - 5.3 カナダ・アメリカの企業訪問
 - 5.4 視察団座談会

の成果を相互に交換しあう役目をもつことはもちろんである。しかし、3年ごとに開かれるという点から、いまひとつ大きな特色をもつ。それは、ORの世界の趨勢を相互に認識しあう点にある。毎年集まっていたのでは、徐々に生じる変化に気づきにくい。3年ごととなると、変化の方向性がはっきりと見えるようになる。今回のカナダでの国際会議もその点に大きな意義があったといえよう。

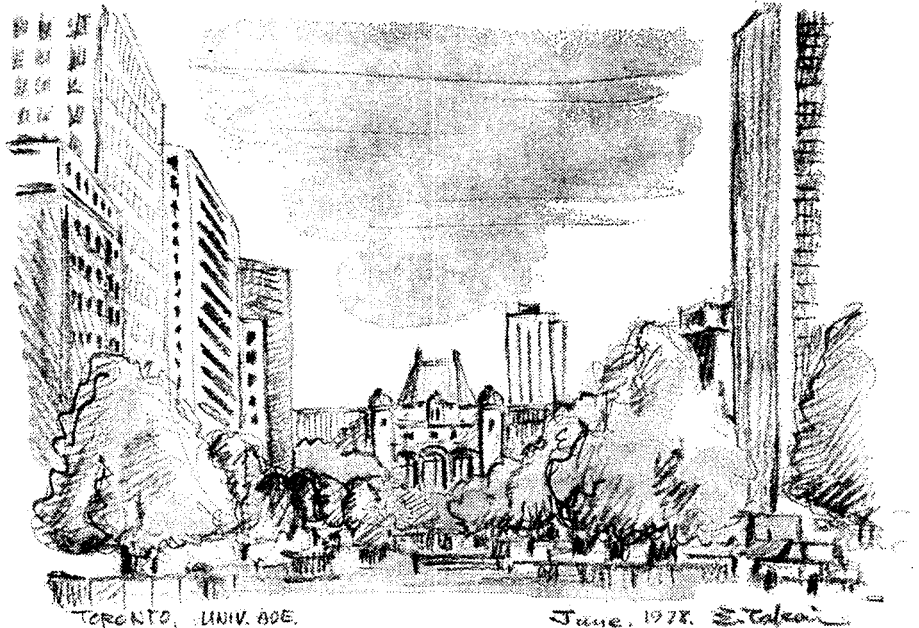
会議は(1)総会講演、(2)基調講演、(3)国別推薦報告、(4)ワークショップ、(5)ストップ・プレス・コロキアの5つの部門にわかれて行なわれた。総会講演と基調講演はいずれも1時間から1時間半くらいのたっぷりとした時間をとり、ORの出発点の話から最新の成果にいたるまでの幅広い話題を各領域の権威者に話してもらった。

それに対し国別の推薦報告は、各国のOR学会が選んだ論文を1題目30分程度で報告するものである。今回の会議では5つの総会講演、10の基調講演、36の推薦報告が行なわれた。

国際会議においては、研究者同士が個人的な対話の中から情報や意見を交換することも重要なことである。そのための仕組みがワークショップとストップ・プレス・コロキアであった。前者は、特定のテーマ別に、関心をもつ者が自由に集まり小集団でつっこんだ話し合いをするものだ。今回の場合14のテーマが立てられ、それらを7つずつ別な日にわけて行ない出席者の便をはかっていた。

また、後者のストップ・プレス・コロキアはいままでにみられなかった新趣向である。自分の最

トロント市ユニバーシ
ティー通り



近の関心、考え、成果などについて発表の希望をあらかじめ申し込んでおく。約75分くらいをひとつのセッションとして、そこに3、4人の発表者が割当てられる。各発表者は10分ずつくらい順番に、聴衆全員の前で発表をする。つぎに聴衆が自分の興味のある発表者別にわかれ、残りの時間を個人的な討論についやすという趣向である。日本OR学会の研究発表会で行なっているペーパー・フェアと研究発表の中間をいくものといえる。このストップ・プレス・コロキアは人気が高く35件もの発表があった。

ストップ・プレス・コロキア以外にもうひとつカナダでの新工夫があった。それは、講演のテープ販売である。総会講演、基調講演の多くを質疑応答までも含め完全に録音して、つぎの日には販売するサービスを行っていた。どの程度の売り上げがあったかは不明であるが、英語の苦手なわれわれには、(いや失礼! 私には)便利なものであったといえる。

さて、この国際会議に関連した内容をつぎの4つの点から多角的にお伝えすることにしよう。第1はこれからのORの方向性についてである。会議全体よりこの点をくみとるため IFORS の会議

中に参加者の若干の方たちにお集まりいただき、話合いの機会をもった。それをとりまとめたのが“ORの行方をめぐって”と題する意見交換の記録である。

第2は、問題をさらにこまかくしぼり、読者全体に関心の深いいくつかのテーマごとに、今回の国際会議から感じられる将来の方向性を示すものである。エネルギー、地域環境、輸送、数理計画のそれぞれの分野において、今回の国際会議で大活躍された諸氏にとりまとめをお願いした。

さて、今回の IFORS は、主催国であるカナダの特色が(良い意味でも、悪い意味でも)強く出ている。この点も、今回の IFORS を考える重要な背景となると思われる。そこで、最近アメリカにおられ、カナダの学会事情に詳しい真鍋氏をわざわざすことにした。これが第3の内容である。

最後の第4はOR視察団の報告である。日本OR学会はすでに会誌等で発表したように、今回の国際会議を中心に、6月14日より7月2日までの日程でカナダ、アメリカにおけるORの視察団を派遣した。それは、国際会議出席のほか、カナダ、アメリカにおけるセミナー、企業訪問などを



3年ぶりの交友をあたためるロビー風景

含むものであった。ここからも、ORの新しい動向と将来をつかむ貴重な情報を得ることができるであろう。それゆえ、セミナーの要点をはじめ企

業訪問記、座談会などによりその詳細を読者にお伝えすることにした次第である。

なお、IFORS 国際会議における総会講演、基調講演、国別推薦報告とワークショップのテーマを第2の「テーマ別の動向」のあとに記しておく。以下の文章中P1、M3などの略号はこのリストの記号をあらわすものである。またリスト中*印を付したものについては前述のカセット・テープが学会事務局に保管してあるので個人的な利用が可能である。最後になったが、IFORS のプログラム・コミティの日本からのメンバーとして、今回の国際学会について大変ご努力された出居茂氏に参加者の一人として謝意を表したい。

2. ORの行方をめぐって

——IFORS CANADA '78 の底流——

司馬正次

「ORの今後の方向の模索」、これこそが今回の国際会議全体を流れる底流であったのではなからうか。このことは、総会講演にもっともはっきりあらわれていた。4回の総会講演のセッションの半分までがORのあり方を直接問い直すものであった。すなわち、ひとつは第二次大戦中にORが発見した当時の状況を自分自身の経験から伝える、いわばORの原点を示す講演であった(P5)。それに対し、いまひとつは、その後30年あまりの発展をふまえ、現在のORの危機を説き、新しいパースペクティブのもとに進む必要性を説くものであった(P4)。原点と現状の両面からORの将来を考えさせようとする主催者の意志をそこからはっきり読みとれる。基調講演や国別推薦報告のなかにもこの流れをくむものがかなりみられた。たとえば情報技術の驚異的な発展のもとでORのアプローチ自体も変化を迫られているとするもの(M10)、また、第二次大戦以後のORの発展を展

望して、未来学やシステム分析とちがったORの新方向を提唱するもの(N5)などがその一例である。

さらに、今後のORの方向を模索する講演もかなり多くみられた。総会講演のすべて、さらに基調講演の7割から8割までがそれであったといつて言いすぎではないだろう。食糧、資源、軍備縮小といった世界的諸問題の解決へのORの導入可能性について(M1)や、公共的な問題へのORの適用(M2)、行動科学的観点を入れたORの実施過程についての理論や分析(M3、M6)、などなどそれは枚挙にいとまがない。

このようなORの今後の方向の模索を前にして2つの疑問がおこる。ひとつは「何故この国際会議において、言葉をかえれば何故現時点においてORの今後の方向を問い直す必要がおこってきたか」の疑問である。ORが30年以上発展してきたそのいずれの時期でも、これからいかに進むべき